

# 狂気を中心に立つ紅誠実



狂画五十三駅之一枚 関 一休禅師地藏尊かいげんのづ

河鍋曉斎の「一休を画題にした作品は数点ある。地獄太夫のそばでされこうべに乗って狂気を放つかのように踊る一休が有名で印象的である。しかし、これに劣らない迫力を持つ絵なのに、ほとんど知られていない作品が国文学研究資料館に保存されている。更に珍しいことに、そのテーマは一休というよりも寛文八年（一六六八）に刊行された『一休ばなし』の一話である。「狂画五十三駅」というシリーズの中、関の宿に因んだ画題として「一休禅師地藏尊かいげんのづ」という話を曉斎が選んだ。そのあらすじは次のようである。

関の人々に地藏像の開眼式を行うように頼まれた一休が、突然像に尿をかける。怒りに狂った信者たちが逃げた冒険者を追っている間に、尼僧たちが慌てて尊像を洗う。しかし、汚れを洗い落とした途端に一休を追っていた村人が倒れて、トランス状態になった尼さんを通して地蔵が「天下の老和尚一休の開眼なされしを、何とて洗い落としかけるぞ」と叱った。その状況を知った一休が自分の禪を渡し地蔵の首に巻

くように指示する。その通りにしたら、倒れていた人々と尼僧たちが忽ち治る――。

狂画の画題としていかにも相応しい話であるが、曉斎の作品はそれをそのまま絵にしたわけではなく、幾つかの工夫を施した。最も目につくのは『一休ばなし』との違いであろう。絵では一休自身が禪を地蔵の首に巻こうとしている。周りには笑っている野次馬が見られるが、話の結末に合わない怒っている村人も描かれている。つまり、ここの話の一つの場面というよりも、曉斎が全体の雰囲気こだわった。

もう一つ気になる点は、真ん中にある巨大な赤い鞘の太刀である。『一休ばなし』には登場しないが、『一休和尚年譜』によると、四十二歳の一休が刀を携えて堺の街を歩いていた。武器を持っている僧侶に驚く人々の前に一休が鞘を抜くと、木刀であったと皆が気づく。そこで一休が「お前たちまだ知らないのか。今の偽坊主どもがこの木刀と同じじゃ。鞘に収めると真剣に似ているが、抜けばただの木片でしかない」と戒めた。この逸話は一休像の一つのタイプの所謂「朱太刀像」のものである。しかし、朱太刀像のほとんどが謹厳な頂相であって、『一休ばなし』の描いている一休の世界からとても遠い。だが、曉斎にはその朱太刀が一休のシンボルになっていたのである。「地獄太夫と一休」をテーマにした一枚の作品にも朱太刀が見られるが、そこやはり画題と直接関係がなく、ただ一休の付属品としてのみ置いてある。

室町時代から尊敬されている禅僧一休宗純と江戸時代から庶民に慕われた「一休さん」は違うルーツから来た二つの顔であった。現代の一休のイメージはこの二つを組み合わせたものであると言えるが、この二面が曉斎のちよっとふざけた絵の中で早くも顔合わせをしていた。